原 著

看護大学最終学年次の学生の職業的アイデンティティに影響する要因

Factors That Influence the Occupational Identity of Student Nurses in Their Final Year of University Education

中村 眞理子 *　藤本 裕二 **　藤野 裕子 ***
Nakamura Mariko　Fujimoto Yuji　Fujino Yuko
松浦 江美 4)　上野 和美 ****　堀川 新二 *****　楠葉 洋子 4)
Matsuura Emi　Ueno Kazumi　Horikawa Shinji　Kusuba Yoko

要　旨

〔目的〕看護大学の最終学年である4年次生の職業的アイデンティティに影響する要因を明らかにした。

〔方法〕7大学の看護学生4年次生477名を対象とし、4年次の全ての実習を終えた時期に自己記入式質問紙調査を行った。調査項目は、性別、年齢、職業的アイデンティティ（4因子32項目7件法）、職業モデルの存在、学習への主体性、特性的自己効力感（23項目5件法）、首尾一貫感覚（Sense of Coherence：SOC、3項目7件法）とした。分析対象者は、調査票未記入・未完了者および社会人経験をもつ25歳以上を除外した431名であった。分析は、職業的アイデンティティを従属変数とし、職業モデルの存在、学習への主体性、特性的自己効力感、SOCの4項目を独立変数として、stepwise法による重回帰分析を行った。

〔結果〕分析に投入した4項目すべてが、職業的アイデンティティに有意な影響を持つ変数として採択され、調整済みR2は0.294であった。

〔考察〕看護大学生の職業的アイデンティティの向上のために、学生が主体的に学習活動に取り組む姿勢を育成すること、学生にとってよい職業モデルが獲得できるよう支援することが必要である。また、ストレス対処能力を身につけ、自己効力感を育むといった内的特性に着目した教育が重要である。

キーワード：看護大学生、職業的アイデンティティ、最終学年

Abstract

〔Purpose〕The study was conducted to determine factors that influence the occupational identity of student their final year of university.

〔Method〕A self-administered questionnaire survey was conducted with 477 senior student nurses at seven universities after all on-the-job training programs were finished in the fourth year. Questionnaire items included gender, age, occupational identity（four factors and 32 items on a 7-point scale）, existence of any occupational models, voluntary learning, generalized self-efficacy（23 items on a 5-point scale）, and sense of coherence（SOC; three items on a 7-point scale）. Four hundred thirty-one subjects were used for analysis, excluding students who did not undertake or complete the questionnaire and those aged 25 or older who had work experience. Stepwise multiple regression analysis was performed with occupational identity as a dependent variable and the four factors of existence of occupational models, voluntary learning, generalized self-efficacy, and SOC as independent variables.

〔Results〕Four factors that were input into the analysis were identified as variables with a significant influence on occupational identity. Adjusted R2 was 0.294.

〔Discussion〕For enhancement of student nurse's occupational identity, it is necessary to develop a voluntary attitude toward learning activities and provide support for them to acquire a good occupational model. Education focused on internal characteristics is also critical, by which students can develop the ability to cope with stress and build self-efficacy.

Key Words : Student nurses at university, Occupational identity, Final year

*　福岡女学院看護大学　**　佐賀大学医学部看護学科　***　沖縄県立看護大学
****　長崎大学大学院医歯薬学総合研究科　*****　活水女子大学看護学部看護学科

緒言

看護師のキャリア発達において職業的アイデンティティの獲得は重要であり、学生時代からの支援が必要である。現在の看護基礎教育は、従来の職業教育から看護学としての学問的な捉え方へと変化し、大学教育にシフトしている。1995年に全国40校であった看護大学は、2017年4月には265校（日本私立看護系大学協議会，2017）へと劇的に増加し、専門職としての社会的認知や社会からの期待が高くなっている。看護大学の増加に伴い、学生の職業選択の多様性は広がっており、必ずしも看護師になることを最終目標として入学する学生ばかりではない（一柳ら，2009）。したがって、看護基礎教育においては、入学時から学生個々の成長過程や学習環境に応じた支援をしていくことが求められている。

看護学生の職業的アイデンティティに関する先行研究を概観すると、多くの学生が高校生の段階で看護職への進路を選択することから、一般の職業と比べて看護職への職業的アイデンティティは高い（落合ら，2006a）。しかし、自己の適性について十分な吟味を行わないまま進路決定した学生はストレスに弱く、自尊心が傷つきやすいことが指摘されている（松下，木村，1997）。また、青年前期にある看護学生は社会的スキルが未熟で、他者との相互作用や環境要因に影響を受けやすい（魚住，山田，2015）。落合ら（2006）は、職業モデルの存在は職業的アイデンティティに好影響を及ぼすことを明らかにしており、藤本ら（2016）も、特性的自己効力感および職業モデルは職業的アイデンティティと相関があることを報告している。また、本江ら（2009）は、看護学生は職業的役割意識を持っているためSOCが強められることを示唆している。特に臨地実習においては、これら特性的自己効力感、SOC、学習への主体性といった内的要因や外的要因である職業モデルは、看護学生の職業的アイデンティティに影響を及ぼしやすいと考えられる。

職業的アイデンティティの学年別の特徴については、看護短期大学生を対象とした調査で、土屋（2005）が、1年次で高く2年次で低下し、3年次に最も高くなることを報告した。一方、小薮ら（2007）は、1年次で高く、2年次3年次と学年進行に伴い低下することを明らかにしている。波多野、小野寺（1993）は、3年課程の専門学校生および短期大学生を対象として、1年次で高く、2年次で低くなり、3年次は再び上昇するものの、1年次より低いことを指摘している。このように、3年課程の看護学生の職業的アイデンティティは、一様の結果が得られていない。看護学生の職業的アイデンティティは、学年ごとに異なる学習環境との相互作用の影響があると推測できるが、看護大学生を対象とした研究は少ない。

近年、大学教育においてはPBL（Problem-based Learning）/ TBL（Team-Based Learning）やアクティブラーニングといった、課題の発見・解決に向けた主体的な学習方法を取り入れた教育手法が推進されている（文部科学省，2012）。看護大学生は入学当初から自己学習力が高くTBL/PBLなどの学習方法を通して学習力をさらに進展させていくと言われる（西園，2013）。大学教育において質の高い看護専門職を育成するには、倫理感や社会性のみならず自ら研鑽する主体的・自発的な学習能力の開発・充実が求められている（文部科学省，2009）。したがって、内的要因である主体的学習は、看護大学生の職業的アイデンティティの獲得に繋がっていることが考えられる。また、看護大学生は、3年課程の専門学校生および短期大学生と比べると、4年次にそれまでの経験や学びを吟味し看護を再考する時間を持つことができ、職業的アイデンティティの形成に好影響を及ぼすと思われる。

以上のことから、看護学生の職業的アイデンティティに関する先行研究では、3年課程の学生を対象としたものが多く、看護大学生を対象とした研究は少ない。そこで本研究は、総合的な科目の履修を終え、かつ全ての臨地実習を終了した看護大学最終学年である4年次生を対象に、職業的アイデンティティに影響する要因について明らかにすることを目的とした。

方法

1. 調査対象者および調査方法

7大学の看護大学生（4年次生）を対象に、自己

記入式質問紙調査を行った。7大学は国立系3大学、公立系2大学、私立系2大学で構成され、全ての大学に研究者が赴き調査した。合計477名の学生に調査票を配布し、調査対象者には、研究への参加・不参加が他者にわからないように配慮して、回答の有無にかかわらず提出を依頼した。調査票の回答を持って研究参加の同意とした。調査票未記入・未完了者は除外し、社会人経験をもつ25歳以上の対象者は入学動機や背景などが異なると考えられることから、発達課題のバイアスを勘案し除外した。431名を分析対象とした（有効回答率95.1%）。調査は、全ての実習を終えた20XX年10月～20XX年12月の授業に支障のない時間に行った。

2. 調査項目

1）個人的背景

年齢、性別、職業モデルの存在について質問した。職業モデルの存在は、2件法（1点=いる、0点=いない）で回答を求めた。

2）職業的アイデンティティ

藤井ら（2002）の「医療系大学生用職業的アイデンティティ尺度」を使用した。「看護職の選択と成長への自信」「看護職観の確立」「看護職として必要とされることへの自負」「社会への貢献の志向」の4因子32項目で構成され、7件法（1点=全く当てはまらない～7点=非常によく当てはまる）で回答を求めた。得点範囲は32点～224点で、得点が高いほど職業的アイデンティティが高い。

3）学習に関する項目

学習への主体性：4年間の学習に対する主体的な取り組みについて2件法（1=思う、0=思わない）で回答を求めた。

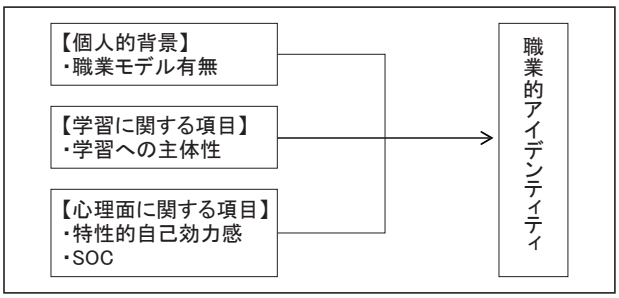
4）心理面に関する項目

（1）特性的自己効力感：本研究では、Sherer ら（1982）が作成し、成田ら（1995）によって翻訳された「特性的自己効力感尺度」を使用した。特性的自己効力感は、個人の行動を予測し制御する上で、ある種の人格特性的な認知傾向とみなすことができる（成田ら，1995）。23項目から構成され、5件法（1点=そう思わない～5点=そう思う）で回答を求めた。得点範囲は23点～115点で、得点が高いほど特性的自己効力感が高い。

（2）首尾一貫感覚（Sence of Coherence　SOC）：本研究では、戸ヶ里（2011）が開発した「SOC3項目版スケール（把握可能感、処理可能感、有意味感の3項目）」を使用し、7件法（1点=全く当てはまらない～7点=よく当てはまる）で回答を求めた。得点範囲は3点～21点で、得点が高いほど、ストレス対処能力が強い。

3. 分析方法

図1　分析モデル



4年次生の職業的アイデンティティに影響する要因を検討するために、重回帰分析（stepwise 法）を行った。従属変数を職業的アイデンティティとし、投入する独立変数は【個人的背景】職業モデルの存在、【学習に関する項目】学習への主体性、【心理面に関する項目】特性的自己効力感、SOC の4項目とした（図1）。重回帰分析に当たり、従属変数が正規分布を示していなかったため対数変換を行った。また、独立変数間に強い共線性がないことを確認した。分析には SPSS Statistics 23を使用した。有意水準は5%とした。

4. 倫理的配慮

本研究は、A大学倫理委員会の承諾を得て実施した（承認番号11122281）。対象学生には、研究の趣旨および方法、研究参加の任意性や拒否・中断による学業成績への影響や不利益は一切ないことを説明した。また調査票は無記名とし、結果は数値化するため個人は特定されないこと、研究成果について公表すること、研究以外の目的では使用しないことを文書および口頭で説明した。調査は授業に支障のない時間に実施し、回答済の調査票の提出をもって研究参加の同意とみなした。なお、本研究に関しては開示すべき利益相反はない。

結果

1. 対象者の概要（表1）

対象者は、男性 13 名(3.0%)、女性 418 名(97.0%)で、平均年齢（SD）は 21.7（0.6）歳であった。職業モデルがいる学生は 199 名（46.2%)、「講義や演習・実習を主体的に取り組んだ」と回答した学生は 348 名（80.7%）を占めた。

心理面に関する Cronbach' α係数は、特性的自己効力感尺度で 0.879、SOC で 0.848 と、いずれも高い信頼性示した。職業的アイデンティティの Cronbach' α係数についても 0.968 と高い信頼性を示し、合計平均得点(SD)は 156.3(27.7)点であった。下位項目の項目平均得点では、「社会への貢献の志向」が最も高く 5.4 点、「医療職として必要とされることへの自負」が最も低く 4.6 点であった。特性的自己効力感合計平均得点（SD）は 73.4（12.1）点、SOC 合計平均得点（SD）は 15.0（3.1）点であった。

表1　対象者の概要

n＝431

項　目		人数(%)	平均(SD)	項目平均得点
年　齢		13（3.0）	21.7（0.6）	
性　別	男　性	13（3.0）		
	女　性	418(97.0)		
職業モデル	い　る	199(46.2)		
	いない	232(53.8)		
学習への主体性	思　う	348(80.7)		
	思わない	83(19.3)		
特性的自己効力感合計			73.4(12.1)	
SOC合計			15.0（3.1）	
職業的アイデンティティ合計			156.3(27.7)	
下位項目	医療職の選択と成長への自信(10項目)		50.1（9.8）	5.0
	医療職観の確立(8項目)		37.8（7.8）	4.7
	医療職として必要とされることへの自負(8 項目)		36.4（8.0）	4.6
	社会への貢献の志向(6項目)		32.1（6.2）	5.4

2. 職業的アイデンティティと各独立変数との相関関係

職業的アイデンティティと各変数間の 2 変量解析を表 2 に示す。職業的アイデンティティと特性的自己効力感との関連は、やや強い正の相関が見られた（$p<0.001$, $\rho = 0.417$)。SOC、学習への主体性および職業モデルの存在との関連は、弱い正の相関が見られた（$p<0.001$, $\rho = 0.331 \sim 0.377$)。

表2　職業的アイデンティティとの相関

n＝431

項　目	職業的アイデンティティ	p 値
特性的自己効力感	0.417	<0.001
SOC	0.377	<0.001
学習への主体性	0.364	<0.001
職業モデル	0.331	<0.001

Spearman's ρ

3. 職業的アイデンティティへの影響要因の分析（重回帰分析）

「学習への主体性」「職業モデルの存在」「SOC」および「特性的自己効力感」の 4 項目すべてが職業的アイデンティティに有意な影響を持つ変数として採択され、調整済み R2 は 0.294 であった（表 3)。

表3　職業的アイデンティティ影響要因の重回帰分析

n＝431

項　目	標準化係数(β)	p 値
学習への主体性	0.261	<0.001
職業モデル	0.220	<0.001
特性的自己効力感	0.190	<0.001
SOC	0.173	<0.001

調整済み R^2＝0.294

考察

1. 職業的アイデンティティと学習への主体性との関連

職業的アイデンティティに最も強く影響を及ぼしていた要因は、学習への主体性であった。この結果は、先行研究では得られていない新たな知見である。主体性とは、他者の影響を受けることなく自分

の意思判断によって自らの責任を持って行動する態度であり（細谷ら，1990）、その中核は、自己決定力といわれている（新井ら，2011）。主体的な学習姿勢と明確な目的意識が関連する（佐藤，2012）ことからも、主体的学習姿勢とは目的意識に基づいた自己決定力に裏付けされた姿勢と言える。

近年、多くの看護大学は、文部科学省の推進するアクティブラーニングを取り入れた教育を行っている（中越ら，2014）。低学年次の学生は、PBL/TBL などでのグループワーク、討論、プレゼンテーションやディベート、看護技術演習などのアクティブラーニングが行われている。高学年次では、課題型学習、シミュレーション教育、実習教育、卒業研究などの高次アクティブラーニングが実施されている。学年が進むに従って、看護の対象となる人々の健康課題に対応したアセスメントやケア計画、実践、評価といった個々の目的意識に基づいた自己決定力が問われる科目が増えてくる。看護を科学的に探究する卒業研究においても、学生の主体的取り組みがより強く求められる。

このように、学年進行に伴って培われた学習姿勢は、卒業を目前にした 4 年次生にとって、看護師になるという確固たる信念に繋がると思われる。この信念は、職業的アイデンティティの質問項目に多く含まれている。『看護職を選択したことはよかった』『看護職を生涯続けようと思っている』『どんな看護師になりたいかはっきりしている』といった質問項目は、主体的学習姿勢に伴う成果として位置づけられる内容である。

以上のことから、学習への主体性が最も強い要因として職業的アイデンティティに影響したものと考える。

2. 職業的アイデンティティと職業モデルとの関連

本研究における職業モデルは、自分が思い描く看護師としての理想的な役割モデル像を示している。職業モデルの存在は、目指す看護師像を明確にすることができ（室津ら，2014）、職業的アイデンティティに好影響を与えていた。これまで多くの先行研究（藤井ら，2002；交野，高鳥，2012；落合ら，2006b）において、職業的アイデンティティの形成における職業モデルの重要性が指摘されている。本研究対象者の 4 年次生についても先行研究を支持する結果であり、自己のアイデンティティを模索している青年期の学生にとって、職業モデルの存在の意義は大きいと言える。

学生の求める職業モデルとして、「責任感の強い」（室津ら，2014）や、「患者への医療を大切にする」「専門家としての力量を持つ」「臨床への熱意」（藤井ら，2004）といった専門性を認知したもの、「安らぎ型」「専門職熟練型」「美的調和型」「安全配慮型」といったイメージとして捉えるもの（江口，寺澤，2006）など、多様性があり幅広い。また、学生の目指す職業モデルは、学修の進度によって異なり、講義や実習で出会う看護師を通してより専門的・現実的に変化すると言われている（江口，寺澤，2006）。

今回、職業モデルがいる学生といない学生は半々であり、先行研究（藤井ら 2002）と同様の結果であった。しかし、職業モデルは学年進行と共に変化し、自分の職業選択や成長への自信といった個人内の側面に影響を与えると言われている（藤井ら 2002）。本研究対象者においても、4 年間の学修を通してさまざまな職業モデルに出会っていることが考えられる。したがって、自分にとってのより良い職業モデルが確立してきていると推測され、職業モデルが 2 番目に職業的アイデンティティの影響要因として採択されたと考える。しかしながら職業モデルを 2 択にした設問形式については今後の課題である。

3. 職業的アイデンティティと SOC との関連

SOC は Antonovsky（1987/2001）が提唱した首尾一貫感覚と呼ばれるもので、「把握可能感」「処理可能感」「有意味感」の 3 つの下位概念で構成される。それぞれの感覚を駆使することで健康保持機能、ストレス対処機能を発揮することができ、人生経験を通じて後天的に獲得されていく（Antonovsky，1987/2001）。

SOC が高い学生は、自己肯定意識が強く困難な出来事に対しても十分に乗り越えることができ（臼井ら，2014）、柔軟な対処行動をとることができる（本江ら，2005）。学生にとって、看護職への目標を持ち続け、自分自身を肯定化して看護を学び続ける一貫性やストレスに対処していくという経験は、学生

のSOCを強める要因となる（本江ら,2005）。また、4年次で学ぶ看護総合実習では、学生はさまざまな対象者との人間関係構築や保健・福祉・医療の再考といった思考の転換・統合を経験する。これらの経験は、学生のSOCを高める要因の1つとなり、看護職に就くという自信につながる。この自信が職業的アイデンティティに好影響を及ぼしたと推察される。

4. 職業的アイデンティティと特性的自己効力感との関連

自己効力感は、Bandura（1977/1979）が提唱した社会的学習理論あるいは社会的認知理論の中核をなす概念の1つであり、個人のある状況における遂行可能性の認知を指す。

本研究で用いた特性的自己効力感は、具体的な個々の課題や状況に依存せずに、より長期的に、より一般化した日常場面における行動に影響する自己効力感である。

特性的自己効力感については、看護大学生の職業に対する愛着との関係が報告されている（更家ら，2011）。職業に対する愛着は、まさに職業的アイデンティティの根底を形成する概念であり、本研究結果も類似する結果と言える。特性的自己効力感が高い学生は、あらゆる物事に対して自信を持って取り組むことができ（小田ら，2003）、肯定的な将来展望を持っている（林ら，1992）ため、職業的アイデンティティに特性的自己効力感が影響したのは納得がいく。

藤本ら（2016）は、1年次と2年次の看護大学生を対象に職業的アイデンティティと特性的自己効力感が双方向に関連していることを報告している。本研究では、4年次生の特性的自己効力感が職業的アイデンティティの影響要因の一つであることを明らかにできた。影響要因の理由として、4年次では、総合的な科目の履修を通して多面的に看護を捉え直し再考することで、自己の専門性を高める機会を得る。また、4年間のさまざまなアクティブラーニングにおける教員や他学生との関わりの中で、物事がうまくいった時の情動喚起や達成感などの経験を重ねる。これらの経験が、4年次生の自己効力感を強めていき、職業的アイデンティティに好影響を及ぼしたと推察する。

本研究の限界と課題

本研究は、看護大学4年次生の職業的ア

イデンティティの影響要因について分析したが、重回帰結果の調整済みR2は0.294であり、分析投入モデルの妥当性に課題が残った。感動体験と自己効力感の関連についての報告（畑下，瀬戸2012）や、社会的スキル修得の必要性についての提言がなされている（文部科学省,2017）ことから、投入モデルについては今後更なる検討を加えていく必要がある。また、「主体的学習」「職業モデル」については、確立された尺度を用いることができなかったため、今後の検討が必要である。

結語

看護大学の最終学年である4年次生431名を対象に職業的アイデンティティに影響する要因を重回帰分析（stepwise法）により検討した。その結果、分析に投入した全ての項目である「学習への主体性」「職業モデルの存在」「SOC」「特性的自己効力感」が有意に影響する要因として採択され、R2は0.294であった。分析から、新しい知見として「学習への主体性」が職業的アイデンティティに強く影響するという結果を得ることができた。

看護大学生の職業的アイデンティティに関する最新の先行研究は、低学年を中心としたもののみであり（藤本ら，2016）、その他の研究は見当たらず、現在に至るまで展開されていない。

本研究結果から、看護大学生が高い職業的アイデンティティを持ち、専門職業人へと移行するためには、本研究で明らかになった影響要因を考慮した教育の検討が有益である。4年間の講義実習においては、学生が主体的に学習活動に取り組む姿勢を育成すること、学生にとってよい職業モデルが獲得できるよう支援することが必要である。また、ストレス対処能力を身につけ、自己効力感を育むといった内的特性に着目した教育が重要である。今後、看護大学生を対象にした更なる調査が望まれる。

文献

Aaron Antonovsky.（1987）/ 山﨑喜比古，吉井清子監訳 .（2001）. ストレス対処と健康保持のメカニズム .17-18, 有信堂 , 東京 .

Albert Bandura.（1977）/ 原野広太郎監訳 .（1979）. 社会学的学習理論 .17-60, 金子書房 , 東京 .

新井清美 , 竹内久美子 , 木暮孝志他 .（2011）. 看護学生の主体性に関する文献研究－主体性を育む教育方法を考える－ . 目白大学健康科学研究 ,4,69-75.

江口瞳 , 寺澤孝文 .（2006）. 看護師イメージの因子構造と学年進行による看護師イメージ得点の変化 . 日本看護研究学会雑誌 ,29（4）,71-80.

藤井恭子 , 本多陽子 , 落合幸子 .（2004）. 医療系学生における職業的モデルがもつ特性 . 茨城県立医療大学紀要 ,9,103-109.

藤井恭子 , 野々村典子 , 鈴木純恵他 .（2002）. 医療系学生における職業的アイデンティティの分析 . 茨城県立医療大学紀要 ,7（7）,131-142.

藤本裕二 , 藤野裕子 , 松浦江美他 .（2016）. 看護大学生低学年の職業的アイデンティティの推移と性的自己効力感及び職業モデルとの関連 . 日本医学看護学教育学会誌 ,25（1）,39-44.

波多野梗子 , 小野寺杜紀 .（1993）. 看護学生および看護婦の職業的アイデンティティの変化 . 日本看護研究学会雑誌 ,16（4）,
21-28.

畑下真里奈 , 瀬戸美奈子 .（2012）. 大学生における感動体験が自己効力感に及ぼす影響 . 関西福祉科学大学総合福祉科学研究 ,3,97 - 104.

林潔 , 瀧本孝雄 .（1992）. 問題解決行動と self-efficacy, および時間的展望との関連について . 白梅学園短期大学紀要 ,28,
51-57.

細谷俊夫 , 河野重男 , 奥田真丈他 .（1990）. 新教育学大辞典 ,3,416-418, 第一法規出版 , 東京 .

一柳陽子 , 谷山 牧 , 山﨑千寿子他 .（2009）. 看護学生の入学・職業線選択動機の実態と構造 . 川崎市立看護短期大学紀要 ,14（1）,21-27.

交野好子 , 高鳥眞理子 .（2012）. 看護学生の学習体験に影響を及ぼす因子に関する研究 . 福井県立大学論集 ,39,87-98.

小薮智子 , 黒田裕子 , 合田友美他 .（2007）. 看護学生の職業的アイデンティティ形成に関する研究（第二報）－経年的変化から考える教育的支援－ . 川崎医慮短期大学紀要 ,27,25-29.

松下由美子 , 木村周 .（1997）. 看護学生の進路選択と職業的同一性との関連 . 日本進路指導学会研究紀要 ,17（2）,12-18.

文部科学省 .（2017）. 看護学教育モデル・コア・カリキュラム .2017-12-18.www.mext.
go.jp/b_menu/shingi/.../1397885_1.pdf

文部科学省 .（2012）. 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて（答申）.
2017-2-21.http://www.mext.go.jp/ component/b_menu/shingi/toushin/
_icsFiles/afieldfile/2012-10-04.1325048_1.pdf

文部科学省 .（2009）. 大学における看護系人材養成のあり方に関する検討会，2017-8-27.http://www.shumei-u.ac.jp /university/info/n_syusi_siryol.pdf

本江朝美 , 川口毅 , 谷山牧他 .（2005）. 女子看護学生の sence of coherence とその関連要因の検討 . 昭和医会誌 ,65（4）,365-373.

室津史子 , 贄育子 , 重本津多子他 .（2014）. 看護学生の看護師に対するイメージおよびキャリアコミットメント－学年による比
較－ . ヒューマンケア研究学会誌 ,5（2）,
37-44.

中越元子 , 野原幸男 , 林正彦他 .（2014）. チーム基盤型学習（TBL）と問題解決型学習（PBL）を統合した授業「プレゼンテーション」の実践 . 京都大学高等教育研究 ,20,17-29.

成田健一 , 下仲順子 , 中里克治他 .（1995）. 特性的自己効力感尺度の検討 - 生涯発達利用の可能性を探る - 教育心理学研究 ,43（3）,306-314.

日本私立看護系大学協議会 .2017-9-20.
http://www.janpu.or.jp/campaign/file/ulist.pdf

小田日出子 , 焼山和憲 , 中馬成子他 .（2003）. 看護学生の社会的スキルと自己効力感に関する研究 , 西南女学院大学紀要 ,7,37-46.

落合幸子 , 本多陽子 , 落合良行他 .（2006）. 医療系大学への進路決定プロセスと入学後の職業的アイデンティティとの関連 . 医学教育 ,37（3）,141-149.

落合幸子 , 紙屋克子 , マイマイティパリダ他 .(2006). エキスパートモデルが看護学生の職業的アイデンティティに及ぼす影響－自己効力感・評価懸念との関連から見た効果－ . 茨城県立医療大学紀要 ,11,
71-77.
更家慧 , 子安君枝 , 池田千秋他 .（2011）.A 看護系大学生の職業コミットメント , 自己効力感及び抑うつ傾向の関連 . 日本医学看護学教育学会誌 ,20,3-7.
佐藤美佳 .（2012）. 自己決定理論の視点に基づいた看護学生の自律性欲求と自尊感情 , 学習動機づけとの関連 . 八戸短期大学研究紀要 ,35,53-71.
Sherer,J.E Maddux,B Mercandante,etal.
（1982）.Theself-efficacy scale:Construction and valiation.Psychological Reports.51,663-671.
戸ヶ里泰典 .（2011）. 大規模多機能目的一般住民調査向け東大健康社会学版 SOC3 項目スケール（University of Tokyo Health Sociology version of the SOC3 scale）の信頼性と妥当性の検討～ 3 時点の JLPS 若年・壮年データより . 東京大学社会学科研究所パネル調査プロジェクトディスカッションペーパーシリーズ ,45,1-20.
土屋八千代 .（2005）. 看護学生の職業同一性地位とストレス対処行動の経年的変化 . 南九州看護研究誌 ,3（1）,1-10.
魚住郁子 , 山田紀代美 .（2015）. 青年期にある看護学生の自我同一性と仲間関係の検討 . 日本看護研究学会雑誌 ,37（5）,35-43.
臼井麻里子 , 金子さゆり , 樅野香苗 .（2014）. 看護のストレス対処能力と基礎看護学実習におけるストレス要因との関連 . 名古屋市立大学看護学部紀要 ,13,27-35.